

九州朝陽会報

平成二十三年十二月一日発行第十六号

連載「新宿の思い出」

第六回「九月に思ったこと」

朝陽同窓会顧問・九州朝陽会名誉会員

佐藤 喜一（新一回）



若き日の石川太郎先生
（昭和31年ごろ）

《新宿》には名物先生が多くおられた。管理職にはならず、永年教壇に立たれ、《新宿》で定年を迎えられた方々だ。

まず一人挙げよ、といわれればタロウさんこと、生物の石川太郎先生か。昭和二十一年の二期から《六中》の教壇に立たれ、昭和五十三年に定年退職された。32年生あたりまでの卒業生は、存じあげてゐるだろう。

遺伝子の話も面白かったが、なんといいっても戦（イクサ）の話が残った。海軍軍人として南方に派

遣された時の苦戦の状況が詳細に語られ、私たちは固唾を呑んで聞き入ったものだった。

九月十八日、その太郎さんに、ある同期会でお目にかかった。九十四歳とは思えぬほどお元気だったが、こんな会話が耳に残った。――佐藤君、君は校長になんかならなくて良かったネ！

「そう思います」と私。

「俺もネ、いろんな奴から教頭、校長にならんかとすすめられたけれど、アメ公に負けた敗残兵、偉くなったって仕様がねえやと思つて、生涯一兵卒で終わっちまった。それが実に良かった！

「敗残兵」というのは太郎さん独自のレトリック。言葉の陰に、イクサには敗けたけれど、人生には敗けてないゾ、という自負がこめられているように思う。

管理職になつてあれやこれやと対生徒以外のことに気を使うことのわずらわしさをご存知だったからこそ、生涯生徒とともにという道を歩まれたのだ。

《新宿》にはそういう先生がたくさんおられた。この学校に骨を埋めようと考える先生が当然とされる人事制度があった。私は二十四年勤めたが三十年以上勤務された方がかなり多い。そうした方々が、人の和を重んじ、常に生徒と

つながろうと努め、学校をよりよくしようと考えておられた。だからこそ、独自の《新宿》の文化が育てられたのだと私は信じている。

それが今はどうだ！ 校長は三〇四年で交替だ。教師も四年ないし六年で、木の葉の飛び散るように転勤させられる。そういう制度を都教委が作り出してしまった。

卒業する。大学生になる。四年経つて就職が決まる。久しぶりに母校を訪れて報告しようと思つても、恩師はもういない。師弟のつながりは希薄になるだろう。伝統とか文化とかが、はたしてよりよく生きつづけるだろうか。

九月十一日に久しぶりに母校を訪れた。朝陽祭（学園祭）だった。受付の近くにいた利発そうな三年生の女子生徒に、『朝陽』っていう意味わかる？』とたずねたら、『知らナイ』という返事だった。都立新宿高校教師を辞めて、二十四年経った。都立高校新宿支店じゃこまるんだよナ、と呟きながら、甲州街道を歩いていた。

（2011・9・20 寄稿）



原発・半世紀前

（朝陽）相談役

豊田 信夫（新？回）

野田総理は、国連総会演説で、福島第一原発の冷温停止は年内に達成できる見通しだと発言したが果たしてそうだろうか。これまでの東電の試行錯誤的な頼りない対応を見ていると、疑問視せざるを得ない。原発はひとたび事故を起こして、放射性物質の汚染が流出したら人間の手には負えないと言うのがこの半年間の実感である。

九月二十五日午後十時半より一時間半かけて、NHK教育TVで『原発事故への道程』と言うタイトルで、原発の安全神話の形成から崩壊までの半世紀を検証する番組が放映された。記憶を辿つてその概略を記述すると、原発が産声をあげる半世紀前から原発を推進する国と地元との対立住民との闘争が繰り広げられていたことが分かる。

半世紀前、日本初の原発として愛媛県の伊方町に、国と地元漁協と農協幹部が共同で原発誘致に乗り出していった。伊方の農業や漁業に携わる地元住民から、原発が汚染を生むのではないかと素朴な不安の声が上がり、一九七三年、日

本初の伊方原発訴訟が発生、原告住民三五人が法廷闘争に持ち込み、その争いは激しいものであった。双方が弁護士と原子力学者を付けて証人に立てた。国側は原発事故の確率は如何に低いか、その確率は一〇〇万分の一であろう、原子力の社会的効用を考えれば一〇〇万分の一の確率の事故は無視してよいと言いきった。一九七八年、伊方原発訴訟の判決の日、判決は『原告団の要求を棄却する』と言うもので、国側の勝訴が確定した。これによって原子炉の設置は、住民の反対の有無に拘わらず国の裁量で決められることになった。

その後外国で一大事件が発生。一九七九年三月米国のスリーマイル原発で炉心溶融が発生して、数万人の住民が避難を余儀なくされた。これが、既に決着がついていた伊方原発訴訟にも影響を与え、原告側はメルトダウンのことを蒸し返して最高裁に上告した。更にその後福島第一原発で導入している米国のGE社製のマーク一型原子炉に重大な欠陥があることを米国GE社から知らされた。国はこの警告をも無視してしまい、米国側でもGE社の上層部は重大な欠陥のことを問題にせず、警告を発していた技術者を解雇した。一九

九二年伊方原発訴訟で最高裁の判決がでた。判決は『原告の要求を棄却する』というものであった。NHK番組の内容は概略以上のものであった。

こうして『原子力は限りなく安全である』と言う思想で、原発を国策として進めてきた国と、それにお墨付きを与えてきた司法の責任は、今回の福島第一原発事故に鑑みて誠に重大だと言わざるを得ません。

福島第一原発事故を契機に、原子力にはド素人の我々一般市民も、原子力にかなりの知識と関心を持つようになった。

原発が稼働して四十五年。原子炉の寿命は数十年。国や電力会社は原発を造ることばかりに力を入れて、原発から出てくる大量の放射性廃棄物をどうするかの問題を後回しにしてきたツケが今重くのしかかっている。廃炉で出る何万吨ともいう放射性廃棄物をどこに捨てるか捨て場所がない。地下一〇〇メートル位のところに埋設するというのが、日本のどこの県がそんな場所を提供できるのか。原子炉は構造物が巨大で大量の放射性物質が出るため、本体を解体、撤去し更地にするまで二十、三十年掛かり、廃炉には建設以上の費用と歳月が費やされるという。い

つかテレビでチェルノブイリ原発事故の事故処理担当者が「元の状態に戻るには何年かかるでしょうか」という質問に対して「三〇〇年位かかるでしょう」と答えていたのが頭にこびり付いて離れない。

半世紀前に、一〇〇万分の一の確率の事故は無視してよいとして国が進めてきた原子力行政が、今一〇〇万分の一の確率の事故に遭遇して四苦八苦している。事故の教訓は今後の国の原子力行政にどれだけ反映され、どう生かされるのか。政治家は原子力に関しては素人集団である。知ったかぶりはないで、謙虚に原子力専門学者の意見を求めるべきであろう。半世紀前の伊方原発訴訟で明らかになったように、原子力学者全てが人格高潔な人物とは限らない。様々な考えを一本化して、原子力行政に生かして行くのが政治家の仕事ではなからうか。

(2011.9.25 寄稿)

運命の人

九州朝陽会幹事

岡本 稔 (新14回)

私の作家、山崎豊子との最初の出会いは「大地の子」です。私が新日本製鐵に在職中の一九九一年

頃でした。「大地の子」の主人公、陸一心は、先の日中戦争で中国残留孤児となりましたが、親切な中国人に育てられました。学業も優秀で立派な技術者に成長しながら、日本人の血が流れているが故に、苦難の人生を歩むストーリーです。そして、小説の舞台の中心が、日中国交正常化後の対中経済協力、技術協力の象徴として、新日本製鐵が全面的に技術協力した上海宝山製鉄所の建設でした。小説ではありますが、ほぼ実話に近い内容で、日本側の登場人物は新日鉄の実在の人を連想させます。一九九五年にNHKでドラマ化され、中国残留孤児役の上川隆也と日本の父親役の仲代達矢の名演技に多くの人が感動し、涙を誘われたと思います。新日鉄内では、日本の父親は実在の人かどうか、もし実在ならT部長ではと話題になりました。

山崎豊子は実際の事件や出来事を、徹底的に取材し調査して、歴史的な事実にもとずき小説として仕上げています。「沈まぬ太陽」「華麗な一族」も同じ手法の小説です。これらの作品に共通しているのは、大企業の内部における様々な人間関係に苦悩する内容で、私は非常に身近に感じました。今回、久しぶりに山崎豊子の「運命の人」を

読みました。

主人公のモデルは、北九州市出身で、毎日新聞の政治部記者だった西山太吉と言われています。西山さんは現在八十歳でまだご健在です。一九七二年五月十五日、佐藤内閣の時に沖縄返還が実現しました。この時に返還費用の負担等に関して、アメリカとの密約があるとしてスクープしたのが、辣腕記者として活躍していた主人公の弓地亮太（西山太吉）でした。しかし政府は密約の存在を否定し、かつ弓地記者が、外務省の女性事務官から、国家機密を不正に入手したとして、国家公務員法違反教唆の罪で起訴しました。裁判では密約漏洩よりも女性事務官とのスキャンダルの方が注目され、結果的に有罪となり、弓地記者は職も名誉も全てを失いました。失意のなか家族とも別離し、一人沖縄に移住し、隠棲生活を送っていました。しかし先の大戦で敗色濃厚にも拘らず、本土決戦を少しでも遅らせる目的で戦った、筆舌しがたい悲惨な沖縄戦の真実を伝えることに、後半生を捧げています。この沖縄返還の密約は政府が否定し続けましたが、近年アメリカの公文書公開により、実在が明らかになり、西山記者らは二〇〇八年に沖縄返還密約文書の開示請求訴訟を起こ

しました。しかし九月三十日の毎日新聞の一面トップで、この訴訟に関する東京高裁の判決が報告され、密約文書が存在したことは認める一方で、なんと密約文書自体は破棄された可能性があると指摘しました。国民に知られて不都合な資料は、破棄してでも徹底的に隠蔽する官僚の体質が露見した事件です。

現在も政府や企業の隠蔽体質が問題視されています。国民の知る権利と国益等を理由に隠蔽する体質との戦いです。今回の東日本大震災や福島原発事故に対する政府の対応にもこの隠蔽体質が如実にあらわれており、情報の信頼性に疑問を持たざるを得ません。

（2011・9・30 寄稿）

鉄道の日

元九州旅客鉄道 社長・会長

石井 幸孝（新3回）

今年の九州朝陽会総会は十月十五日（土）です。昔から十月は一年のうちでも清々しい良い季節ということですから。前日十月十四日は「鉄道の日」です。昔は「鉄道記念日」ということで、国鉄時代から永年表彰式など行っていました。JRになって、国鉄・JR色のな

い「鉄道の日」になった次第です。そもそもの起りは、明治五（一



明治5年鉄道開業式の様子 新橋駅

八七二）年に「汽笛一声」新橋（横浜間に鉄道が開業した日です。もっとも当時はまだ太陰暦で旧暦

九月十二日を太陽暦に読み直したものです。実は古来お目出度い日とされている「重陽の節句」九月九日に明治天皇を迎えて、盛大な式典を行う予定でしたが、折からの豪雨で三日延期になって、九月十二日になったのでした。そして、十二月三日が太陽暦の明治六年一月一日になったのです。どうも鉄道はしょっぱなから、豪雨や災害と裏腹をなしていました。

私事で恐縮ですが、私の誕生日は、「鉄道の日」十月十四日の二日前です。長年鉄道に関係してきた

身として、毎年特別な感慨にふけます。今年は、鉄道にまつわる二つの大きな出来事をしみじみ感ぜざるを得ません。三月十一日、悲惨な東日本大震災に見舞われました。東北新幹線、東北本線、常磐線という東北地方の幹線鉄道が大きな被害を受け不通になりました。嘗て、東北本線が全通したのは、明治二十四（一八九一）年。実は太平洋側からの艦砲射撃を恐れて同線は東北地方の山の中に建設されました。平坦でつくりやすい常磐線を本線にしませんでした。従って、その後に来た東北新幹線も東北本線沿いになりました。今回、常磐線は津波にやられ、加えて福島第一原子力発電所の放射能災害でいまだ開通の見込みがたちません。艦砲射撃が津波に化けるとは思ってもみませんでした。

東海道本線も同じく艦砲射撃を恐れて、当初は中仙道經由で工事を始めましたが、あまりにも工費が高いので今の海周りにになりました。もと考えた山岳ルートは、經由は大分違いますが、今やリニア中央新幹線になろうとしています。東海大震災でも起こると、関東・関西の大動脈をどう守るかの問題を抱えています。

もうひとつ今年の大きな出来事は、東日本大震災の翌日、三月十

新刊書のご紹介

この度石井会長が新刊書籍を出版されました。我々戦中、戦後を知る者には懐かしい挿絵、写真が満載されています。是非ご一読をお勧めします。

JTB パブリッシング キャンプブックス

戦中・戦後の鉄道

激動十五年間のドラマ

定価 2300円

(2011・10・6 寄稿)

二日に九州新幹線鹿児島ルートが全通し、鹿児島から青森までの新幹線列島大動脈ができたことです。正確にいうと、その日は東北新幹線が不通になっていたもので、四月二十九日運転再開の日に繋がったのですが、いずれにしても四年後には函館まで、近い将来札幌まで新幹線の大動脈が出来上がります。半世紀かけてつくった壮大な投資を日本のために、細長い日本列島の「弱み」を「強み」にする施策に活かすべきです。電力に余裕のある深夜時間帯には、今、旅客列車は全く走っていないので、ここにコンテナ・特急（新幹線物流）を走らせたかどうかと検討しています。当初、国鉄時代に検討した案です。物流の近代化やエネルギー対策、日本国の広域支援対策にもなります。大災害や広域環境汚染のリスクヘッジでもあります。

二十三年度総会報告

今年度総会は去る十月十五日に福岡天神の「福新楼」で開催しました。会員は十六名の参加で、朝陽本部からの二名（小泉公生氏、菊池光興氏）の副会長を加えて総勢十八名、いささかさびしさも禁じえませんでした。二テーブルを囲み終始和やかな集まりとなりました。



岡本総幹事の司会で始まり、定例どおりの石井会長の挨拶、事務局報告、本部からの母校の現況紹介に続き、今回の特別講演となりました。

この講演は岡本幹事の同期生（新14）の菊池光興副会長に依るもので、総務省の事務次官を務められた氏が、その後館長を務められた国立公文書館に関するお話でした。

実に興味深い内容で、一同熱心に拝聴しました。懇親会の予定もあり、三十分ほどの少ない時間になってしまったことが、まことに残念であり、世話役として、菊池さんにも申し訳ないことをしました。とかく、独立行政法

人に対する皮相的な見方からの批判が多い昨今、国家としても極めて大切かつ、重要な役割を担って来られた菊池氏の地道なご努力に、深く敬意を表します。講演の為にご用意していただいた国立公文書館の案内資料が若干残っていますので、ご希望があれば頒布いたします。

懇親会も、少人数だっただけに、世代を越えた交流もでき、あつという間に時間も過ぎ、最後は定番の校歌・健児の歌の斉唱で御開きとなりました。石井会長、小泉副会長を囲んで、森さんのお店（コザック）での二次会も十名強が集まり、貸切状態で大いにカラオケを楽しんだようでした。今回は遠路から、松形さん（宮崎）坂本さん（熊本）蜷木さん（大分）も参加されました。今後は遠方の方の帰路を配慮した開催時間などを考慮しようと思っています。

幹事長 記

事務局からのお知らせ

・会員動静

今年の総会時で正会員61名、地域外会員2名、名誉会員1名計64名となりました。

退会員

転居のため退会

川辺正行（新2） 六月東京都へ
三瀧忠道（新22） 五月福島県へ
会則十一條規定による退会

渡辺彬迪（新5）
高増和明（新18）
福山泰介（新18）
安部史子（新25）

新規入会員

佐藤喜哉（新40） 熊本市在住
平成23年六月 新規入会

・年会費納入のお願い

先の総会に参加されなかった会員には、振込取扱票を同封しましたので、今年度年会費千円の納入をお願い致します。郵便局ATMを利用していただけと振込料が安くなります。

編集後記

十六号も、再三会員各位に寄稿を依頼したにも拘わらず、会長はじめいつもの幹事のみになってしまうのは残念です。是非次号（三月一日発行）は新たな投稿のあることを願っています。締め切りは一月末日です。石川太郎先生は編者卒業時のクラス担任で、写真は卒業後のクラス会での四十歳ぐらいの若き頃のお姿です。

編者 記

【発行元】

九州朝陽会事務局

福津市若木台1丁目
20-7

Tel/Fax: 0940-43-5545

Mail: kjun612@nifty.com

【編集者】

九州朝陽会 幹事長

小泉 純理

（新7回）

